

学長告辞（平成25年度卒業式）

平成25年度に、晴れて学習院大学を卒業する皆さん、また大学院を修了される皆さん、おめでとう。心からお祝いしたいと思います。

本年度の卒業生、すなわち学士課程における学びを終えて、学士の学位を取得する諸君は、法学部、経済学部、文学部、理学部、4学部合わせて1842名おられます。また、大学院の博士前期課程を修了し、修士の学位を取得する諸君は、5研究科合わせて134名、博士後期課程に学籍があるうちに博士論文が授与され、めでたく課程博士となられた諸君が4名、さらに、法科大学院において極めて厳しい勉学を修了して、新たに司法試験に挑戦する資格を得た諸君は44名おられます。皆さんに今一度、おめでとう、と申し上げます。ご父母をはじめ、ご家族、ご関係の皆さまも、さぞかしお慶びのことと存じます

ここに、学習院長、桜友会長、父母会長はじめ、来賓各位のご臨席を賜るなかで、式典を無事に挙行できますことを、こころよりうれしく思います。また、この式典には、卒業後30周年、40周年、50周年、さらには60周年を迎えられた卒業生代表の方々にも、ご列席いただいております。たいへんありがたく思います。

ここにおられる圧倒的多数の方は、学士となられる諸君ですが、皆さんが4年前に入学なさった最初に、入学式の学長告辞において、私はかなり長い話をしました。皆さん憶えてはいないかもしれませんが、そのポイントの一つは、このキャンパスという舞台の主人公は、学生諸君、皆さん自身だ。皆さんが積極的にさまざまなことに挑戦し、社会に出てから本当に通用する「自ら学ぶ力」を身につけてほしい。とくに、グローバル化が進行している世界にあっては、世界に目を開いて、世界を視野におさめて生きる、ということが、ますます求められている。それなくしては、われわれ自身が日本について見つめ直すということ自体も難しい、そういう時代がすでに来ている、そういうお話をしました。

さあ、どうでしょう、皆さん。精一杯がんばったぞ、と心から言えますか。多くの方が、さまざまに充実した経験を蓄積したにちがいない、と私としては願っています。しかしまた、他方では、失敗談やし残したこと、ああすべきであった、こうすべきであった、といった点に、今更のように気づくのではないのでしょうか。誰にでも、完璧な時間の過ごし方をするなどということはありませんから、むしろ、そのほうが当然だとも言えます。その場合に、失敗や反省点や気づいたところを、ああもう終わったと行って、ただ通過してしまうのではなく、次の人生のステップに生かしていく、ということこそが、大事なのだと思います。それこそが、人生を通じて学び続けていく姿勢の基本だからです。

喉もと過ぎれば熱さ忘れる、とか、水に流して、といった表現が日本にはあります。たしかに、忘れることも一つの能力ではあります。しかし、人の生き方の最も基本に関わるようなことから、社会のあり方の、そして行く末の、最も基盤に関わるようなことから、そう簡単に忘れ去ってはならないでしょう。今からほぼ3年前、皆さんの多く

が1年生の終わる頃に起こった、東日本大震災とその後の対応、福島第一原発の損壊と放射能汚染の問題も、そうした、日本の、さらには世界の、将来に関わる、その最も基本に関わる課題を、われわれに投げかけた出来事でした。これらはもちろん、忘れるわけには行かないし、なかったことにはできません。単純にリセットするというわけにも行かない。これから生きて行くわれわれ皆が、課題として背負っていかざるを得ないことがらです。

本学の学生のうちで、本人や家族が被災された方はそれほど多くはありませんでした。しかし今回の卒業生のなかにも、おられます。この方たちには、卒業までよくがんばったね、と、とりわけ強く声をかけてあげたいと思います。また、学業の合間に、被災地へのさまざまな支援活動、ボランティア活動に、積極的に加わった、あるいはさらに、そうした活動を自ら率先して組織した方も、このなかにはおられます。こうした諸君には、学長として、ありがとうといわなければなりません。なかなかそうした活動には加われなかった、しかし心のなかで連帯の感情を失っていない、そういう諸君も多いでしょう。いずれにせよ、ほとんどの諸君が卒業後は、学生時代のように、自由な時間を手にすることはできなくなるでしょう。しかしそうしたなかでも、どうぞ、社会への広い眼差し、世界への遠い眼差しを忘れずに、人生を進んでほしいと願っています。

今しがた、「自ら学ぶ力」とか、「人生を通じて学び続けていく」、といったことを言いました。卒業するのに、また学ぶ話か、と思うかもしれませんが。しかしこれは、私が学長として、今年度末で任期満了によって私も皆さんと一緒に退任するのですが、ここまでの毎年の卒業式で必ず、巣立っていかれる諸君に語ってきたことです。

皆さんは、小学校以来、あるいは幼稚園以来、主に学校という場で学んでこられました。こうした学校における教育という段階は、これをもって終了します。大学院へ進まれる方達もおられますが、大学院は、学校教育のステップとは異なった、専門研究の世界になりますので、これは別です。学校という場での教育を、皆さんは初等、中等、高等段階と、積み上げてこられたわけです。その最後の高等教育の修了を意味する大学卒業と学士の学位は、人生における一つの大きな段階が終わり、次の段階へとステップアップしなければならない、そういう区切りの時にあたります。ステップダウンしては困りますし、ストップしても困ります。しかし、注意してほしいのは、学校での学びは終わりますが、人生を生きるなかでの学びという、人間にとっての最も基本的な行為は、まさにライフロングだということです。つまりこの世に生きている限りは、さまざまなことから、さまざまな人との出会いから、あるいはまた、動物や植物のいのちのあり方といった自然からも、さまざまな学びを繰り返していく。学校段階で身につけた多様な知識や能力は、人生のなかで活用してこそのものであって、そうできなければ、ゼロに帰してしまうでしょう。先ほど触れたように、われわれは失敗からも学ぶことができます。むしろ、失敗からこそ学ぶことは多いと、人生の時間を重ねてきた私などは、痛切に感じるところです。

人生における学びには、これだ、という唯一つの方法や様式があるわけではありません。

正解はこれしかない、といった類のものでもないでしょう。一人ひとりが、生きるなかで磨いていく以外のものではない。ですから、人それぞれ、各自の学びの様式を身につけて発展させていくことに尽きます。皆さんには、大学を修了するまでに積み重ねてきた学習と経験とから、すでにその準備はできている、と確信します。そうであればこそ、学士という学位なのだ、という点を忘れずに、肝に銘じてほしいと思います。

卒業生のうちの多くの諸君は、企業や官公庁、自治体等に勤められます。厳しい経験をした就職活動のなかで、多くの先輩にあたる卒業生に皆さん自身お世話になったはずです。これからは、皆さんが、後輩である在校生にたいして、さまざまなアドバイスを与えられるような生き方をしてほしい、と願っています。卒業後は、皆さんの母校となる学習院大学を、今度は、支援する側に立っていただけると幸いです。

世界も日本も、この先ますます、大きな変化を余儀なくされていくでしょう。課題は多く、先行きは明瞭ではありませんが、であればこそ、これからの世界は、若い皆さんの世代が中心になって、背負っていかなければなりません。世界は、諸君の双肩にかかっています。皆さん一人ひとりが生きてゆく場は、それぞれ、さまざまでしょう。それらの場がいずれであれ、一人ひとりが充実した人生を送り、日本と世界を背負って立つ、そういう気概を持って前に進んでほしい、そう願います。諸君の健闘を心から祈っております。

最後に今一度、卒業、修了なさる皆さんに、おめでとう、と言って、私の学長としての最後の告辞を終わります。

平成 26 年 3 月 20 日

学習院大学長 福井憲彦